

たこの平和を、いつまでも守り続けて、この地球上に二度とあのような残酷物語が展開されぬよう、努力していただくことを願って止まないものである。

## ジプシーのごとく

——アジア大陸流転の六年——

石川県 垣内 久米吉

### 全満を渡り歩いたジプシー部隊

私は昭和十八年十一月、金沢の工兵連隊に応召し、三日後には出発。満州東北部の国境の町、東寧（牡丹江省東寧県）に送られたが、頼みの受入れ部隊が既に移動して、もぬけの殻、また冷蔵庫のような貨車に詰め込まれて北上、アムール川（黒龍江）を挟んだソ連と対峙する北の果て、黒河市にほど近い山神府という町に辿り着いた。迎えてくれたのは雪の中から屋根だけが顔を出した三角兵舎で、心細いことといったらなかつた。

そもそも私たちの部隊は、通称満州三六一九部隊、正体は関東軍司令部直轄の第四七野戦道路部隊という工兵の特殊部隊であった。北信越地方から集めた、大方は三十歳を過ぎた年配の補充兵ばかりで、戦闘を主目的とせず、十字鋏、円匙（シヤベル）、爆薬などを携行して、ご用命に応じて大陸を渡り歩くジプシー部隊であった。事実、終戦の日までの一年十カ月の間に、東寧を皮切りに六カ所も移動した次第は次のとおりである。

山神府で三カ月の基礎教育を受けた後、いよいよ本業開始の地は、大興安嶺山脈の中間にあつて、北滿最寒の地帯といわれ免渡河。ここで作戦用道路の建設に三カ月。次は南滿州の鉄都、鞍山に移り、米空軍による第一次爆撃で鞍山製鋼所へぶち込まれた二百五十キロの不発爆弾数百発の後始末であった。この後は西滿州の要衝、通遼（興安南省）である。ここでは西に広がる砂漠地帯を貫く道路の補修作業で、最後は外蒙古との国境アルシャン（阿爾山、興安北省）であつた。

谷間の森で伐採作業を続けていた八月八日、九日の

朝、二日続けて爆撃機の大編隊が西から東へ飛んで行く。「関東軍健在!!」と一同歓喜したのもつかの間、いやな予感に襲われたのは、前年の夏のB29百機による米軍の第二次鞍山空襲を思い出したからである。

炊事の兵隊がわめきながら谷間を登ってくる。

「日ソ開戦だ!!直ちに帰營せよ」

平和の雰囲気は一変した。四人に一挺ずつしか配分されていない三八式小銃に、九九式小銃の弾薬が司令部から届けられる。弾薬庫から黄色爆薬を持ち出して、各自爆薬を背負って敵戦車を待て、といった命令が次々に出されて混乱は増すばかり。

戦車の代わりに黒煙を吐く一本の列車が来た。これが最終列車で、直ちに「転進」だという。かくして、火薬、武器を満載した貨車に押し合いへし合い、昼夜を分かつた後退して、八月十二日、奉天の近郊文官屯に安着した。

八月十五日の奉天は、風もない、蒸し暑い日であった。

二カ月の貨車の旅で中垂へ

奉天で「終戦の詔勅」をおぼろ気に聞いて、武器、弾薬を返納。これでいよいよ故国に帰れる!!朝鮮の鉄道が不通になってるので、北から大回りしてウラジオストックから船に乗るといふ情報に一同狂喜した。

東北大学のレンガ造りの校舎に起居して、先発隊や邦人が残っていた物品から、土産になりそうな服地や靴、缶詰などを物色して、背のう、雑のうにいったい詰め込んで出発の日を鶴首していた。

九月十八日、いよいよ出発。予想通り北上したが、一たん集結する予定の新京は見過ぎて北へ北へ。北安で一週間停車の後、北の果て黒河に着いた。二年前、近くの山神府で一期教育を受けたことを思い出して感無量である。

アムール川を渡って対岸ブラゴエシチェンスクに着き、数日間糧秣の積み込みに使われ、ソ連製の五十トン貨車に乗り込んでこの地を出発したのは十月三十一日。貨車の中は三段に区切られており、私は一番上段の隅に横ばいに潜り込んで、鉄格子のはめられた小窓から絶えず外を注目していた。

列車が東へ行くか、西に向かうか。皆の意見は五分であつたが、プラグエからシベリア本線との交叉駅に着いた三日目の朝、列車は西に向かつて進行していることが確かめられた。失望とあきらめで、車内のざわめきは止んだ。聞こえるものは刻々と祖国を遠ざかる列車の鈍い響きと、至る所に吊された飯ごうや水筒のかち合う音のみである。

十一月八日朝まだき、若い兵隊たちが寒さに足踏みしながらも扉を開けて感嘆の大声を上げている。

へバイカル湖だ!!

エメラルドの湖面の周囲に屏風のように屹立した山々が連なる絶景!! 今日までこの一週間余り、飢餓と落胆に打ちひしがれ、初年兵の一人が栄養失調で絶命するという不幸な出来事もしばし忘れて、湖畔の小駅で停車したのを幸いに、皆は喜々として湖畔の渚に降りていった。顔を洗う者、小石を拾ってくる者、湖水を汲んでくる者……。

私はバイカル湖の素晴らしい景観に打たれると同時に、駅近くの木立の上に掲げられたスターリン、ルー

ズベルト、チャーチルの大肖像画とソ連、米、英の国旗が翻っているのを見て、何とも複雑な思いをしたことを覚えている。

夕方近く大きな駅に着いた。プラットホームがある。何本もの引き込み線もある。

イルクーツクだ。

二本の列車が反対方向に向いて止まっている。一つは貨車の扉も小窓も有刺鉄線で取り巻かれている。囚人列車だろうか、それともドイツ兵捕虜? もう一本の列車は若い女ばかり、ロシア娘の女囚か、ルーマニアやドイツから送られてきた抑留者たちであろうか。

十一月十二日、運命の分岐点ノボシビルスクに着く。ここからさらに西へ向かえばウラルの炭坑地帯や原生林、北へ行けばノリリスクの鉱山地帯と地獄のラール。しかし幸か不幸か、列車は小一時間、引き込み線を前進、後退した後、南に向かつて走り始めた。私たちは中央アジアに行くのだ。梯団長が奉天でソ連側に対し、暖かい土地へやってほしいと頼んだという噂は本当だったのだ。お互いに顔見せ合せて奇妙な喜

び方であつた。

南下するに従つて雪は消えてゆき、褐色の地肌が見え始めた。そして二日、三日、四日、駅と駅の間は人家も人影もない、荒涼寂寞である。

満州でも見たことのない大平原の彼方に、やがて天山山脈の山並みが白く光り、草原の奥に蜃気楼のようにビルが立ち並び、車、電車まで動いている大都会が出現する。ウズベク共和国の首都タシケントであつた。

期待していたタシケントでの下車命令はなく、さらに百キロほど南下して、パプロダルという小駅に到着したのは十一月十八日。奉天を出てからまさに丸二カ月の飢餓と不安の大旅行であつた。シベリア「横断」はまさしく「黄痘」であつた。

#### 綿畑の寒村

パプロダルは、町というより、不毛の砂漠を開発した綿畑の集落であつた。

高い堤防を築いて運河を造り、水を引き、堤の両側には防風林がすくすくと伸びている。林と林の間は約一キロ、それに囲まれた綿畑が何枚、何十枚と続いて

いる。

重いリュックサックを背負つて、ガタガタするひざで幾つかの防風林を過ぎて、やっとバラックに着く。泥造りの建物で、屋内は壁に沿つて止まり木が二段式に組み立てられている。

疲労困憊の老兵たちはしばし土間にぶつ倒れていたが、私は上段の窓際によじ上り、立てかけてあつた泥柳の枝で編んだ畳ほどの大きさの敷物（私たちはこれを編畳と呼んだ）を止まり木と止まり木の間に渡してネグラとした。

着いたその日から、私たちの一番の関心事、「食事」がないという珍事！所内には私たちの糧秣は用意されておらず、満州から運んで来たコウリヤンや大豆であると聞かされて、これからの生活を思つて戦慄するばかりだつた。

このバラックの前住者はドイツ、イタリア、ルーマニアの捕虜で、そのうちの何人かは今も所内のパン工場、炊事場、洗濯場などに残っている。新入者の所持品や装具検査があつて、目ぼしい物は取り上げられる

ということも教えられて、一同戦々兢兢、時計などの隠し場所に苦心する始末であった。

生まれて初めての綿摘み作業に出る。防風林に囲まれた綿畑は、十二月ともなれば一面褐色の枯れ木のみである。取り残された真っ白な綿畑があった。ウズベク人の監督の指示で、一列横隊に並んで、葉の茎も枯れた上部に付着した綿花を摘んで袋に入れていくのである。

体力の衰えた私たちには、中腰になつての作業は五分と続かない。どの畝を見ても、綿袋をかたわらに置き、腰をおろして雑談に夢中である。

一日にわずか数キロしか摘めなかつたが、翌年の夏に出掛けた折は、一人平均三十キロという成績であった。「一番綿」を摘むときの新鮮な快感に魅せられたわけではない。成績の上下が食糧の配給量に比例したからである。ウズベクの娘たちは、綿摘みの成績が嫁入りの第一条件であると教えられた。

年末、靴ずれで腫れた踵が悪化するばかりで、診断を受けると作業休となり、営内作業に従事したが、病

死者の穴掘りまで命ぜられ、その上、同郷で同年兵の丁君の死に遭つて、気持ちには滅入るばかりだった。イタリアの軍医の診断で入院を命ぜられ、新年早々、不覚にも重態に陥つた。「破傷風、敗血症、丹毒？」といった囁きが耳をかすめた。全快してから知つたことだが、医務室からバラックへ連絡があつて、「夜明けまで命は持たないだろう。戦友で面会したい者は夕方病室に来るように」と言われていたそうである。

四日後に手術。踵の上と膝下に切り口を開け、膿を絞り出した後、ヨードチンキを浸したガーゼを針金に巻き、一方の切り口から他方の口へ届かせ、ガーゼの両端を持つてしごくという荒療治。私のうなり声に同室の患者はみな起き上がつて恐怖に震えていたという。私を癒してくれた恩人藤原軍医は、青酸カリを所持していた廉で、あるいは死者を多く出した責任で、後日刑務所に送られた。

四月に退院した私は第三分所に送られ、しばらく医務室勤務の後、綿畑の農作業、続いて軽作業とされる土レンガ造りに出た。木型に泥を詰めると一度に四個

できる。ノルマは一人何個だと聞くと、監督は個数は言わず、広場いっぱい造ることがノルマだといった。夏になるとまた分所にあつて、第二、第六などへ季節によつて助つ人に行つたわけである。

第六では外人部隊と雑居。貨車が入つてくると、文句を言わず綿実積み込みの終夜作業になる。見張りを配置して抜け目なくサボるドイツ兵のチームワークには舌を巻いた。第二分所では印象に残る出来事があつた。四月二十九日の嘉日の朝、営庭から「君が代」が聞こえてきたことである。各作業班が直立不動で東の空を仰ぎながらの斉唱。雲間から真つ赤な太陽のぞいていた。私も知らず知らずのうちに「君が代」を口ずさんで、涙を流していた。

この辺鄙な分所にはまだ「日本新聞」も届かず、思想教育の動きもなく、戦前の日本、ふるさとがあるような感慨を覚えた。

ダモイ（帰還）の噂が飛び交うようになった夏、入院患者の一部が帰還の途についていた。

強い者は残されるのか、反軍闘争、民主教育に参加

する者は早く帰されるのか、各自の胸中は千々に乱れる日々であつたが、第三分所に帰つてみると、かつての軍隊秩序に代わつて新しい秩序が芽生えていた。

二十二年の暮れも押し詰まつたころ、ダモイの声がわき上がった。駅には長い列車が着いているとか、炊事場では炊事車の準備が始まつたという。ナホトカ港が結氷しているのにダモイはおかしい。他所への移動だ!?

二十三年一月元旦。私たち千二百名の日本兵の車両の後ろにドイツ人、警戒兵の車両をつないで、まさしく列車はパプロダルを後にした。見送る収容所長の表情に明るいものがえなかつたのが気がかりだつた。運命の分岐点ノボシビルスクで、ドイツ人を乗せた列車は東へ、私たちの列車は西へ……!?!全く逆ではないか。運命の皮肉さに口をきく者はなかつた。

#### カラガンダの大炭田

シベリアの西端ペトロパロフスクから列車は南へ向かつた。ドイツ人が予言した通り、私たちは間違ひなくカラガンダの炭坑行きだつた。

真つ白な雪原の中に、真つ黒なポタ山が幾つも幾つも重なり合つて続いている異様な風景の中を小一時間トラックに分乗して第二十二收容所に着く。真つ白な雪壁が立ちはだかつている。よくよく見れば收容所の塀である。営門の辺りに数人の男が除雪作業をしている。

その中の一人、眉やまつ毛が白く凍りついた男が、明るい笑みを浮かべて、

「待つていました。自分はパプロダルの第四分所にいたYです」

地獄のようなこの環境の中で、どうしてあんなに明るい表情が……、私は不思議でならなかった。

收容所の建物は、パプロダルの泥壁と異なり赤レンガ建てである。電灯もあれば、一人ずつ寝られる二段式木製のベッドもある。そしてペーチカには火が赤々と燃えている。

十分間ほどの休憩後、室内の清掃を命ぜられる。雪で床を磨けというのだ。二回、三回とやり直しさせられてようやくパス。夜は、ソ連式の労働服を着た日本

人がやって来て、この收容所の概要を説明してくれた。「諸君の入っているのは第一棟と第二棟である。このラーゲルを建てたのは、現在第五、第六棟にいる満州第〇〇隊の現役兵である。第七棟は民間人、所内の建物は他にもかくかく……。この一、二棟の者は坑内作業に就かない、屋外専属だ」

と聞いてまずホツとした。現在はドンバス、クズバスと並んでソ連の三大炭坑地帯だが、四十年ほど前、石炭が発見されるまでは、鳥も住めない茫漠たる寒冷地帯であつたという。

#### 恐ろしい雪嵐

カラガンダでの作業は、石山行きで始まつた。石山といつても石もなく木もない丘であつたが、斜面一帯を地ならしして近代的な碎石場を初め建設関係の工場倉庫が建つという。その基礎づくりの穴掘りや地ならしであつたが、吹きさらしの中の作業は、十五分ごとの交代という厳しさである。小屋に入つての休憩も焚き火に面した部分だけ少し暖かい程度で、背筋は氷のように冷たい。焚き火の周りをくるくる踊つて暖を

とる辛さであった。

重労働の割にノルマが上がらぬ作業場だと後で聞いたが、収容所に帰れば帰ったで、熱狂的になってきた民主運動と、それに批判的な反動組との反目が、時には乱闘となり、炊事場での争いになって、一日として安息できない日が続くようになった。

私たちにとって最も関心の深い食物と帰還、一方、ソ連側にしても最も関心のあるノルマと思想教育、その中間にあつて媒介役を受け持つ「日本新聞」とその友の会、そうして民主グループ……。自然発生的な雰囲気を作る計画がどこかで巧妙に仕組まれ、それが二年間に着々と実行に移されてきたとしか思えない。

この地の雪嵐の物すごさは、また生涯忘れられないものであった。大波小波のように吹き寄せる吹雪は、しばらくの間に入口の扉をどんなに押ししても開けなくする。深夜といえども死に物狂いで交代で除雪するのである。便所の方向を見定めて飛び出す、帰りは迷子になる者が続出する。一番大切な食堂へ行くことを断念する者も出てくる恐ろしさであった。

若い現役兵らが結成した青年行動隊とか突撃隊とかの活動が燃えに燃えると、私たち老兵もその狂熱にあおられて、石山の一角にある石崖に挑戦して爆破作業に出るようになる。

成績が上がってわが小隊にも名誉の赤旗が授与され、賞金も出て、以後は突撃隊と称されるようになった。各自に二十ルーブルずつの賞金には大喜び、これで帰還のとき、カラガンダ市内で土産物の買物ができた。その反面、作業に熱を入れ過ぎて、あたら片腕を失くしたり、負傷する者も多かった。

約半年の石山作業の後、私は定例の体格検査で三級と言ひ渡され、荷物をまとめて第四棟へ移った。軽作業の雑役に就くことになったが、六月初め、作業に出て雨にずぶ濡れになったのが原因で発熱。その後は警戒兵の補助員（ベーカー）を命ぜられて、作業隊に同行して現場をうろろするだけの楽な役目になった。作業員の頼みを聞いて、マガジン（物品販売所）へ買い物に行つてやるのも仕事の一つだった。

九月末の秋晴れの日の朝、長い間待ちに待った帰還



者の発表があつた。ABC順に読み上げられる氏名、ついに私の名前が呼ばれた。私は思わず万歳を叫んだ。

出発の前日、カラガンダの市街へ出してもらつて、百貨店で土産物を買つた。私は綿布十ヤールと皮靴一足、それに「カズベック」という巻きたばこ六箱を買い求めた。国立劇場でロシアバレエを観たいと思つたが、財布の中身をのぞいて断念した。

十月三日、思い出のカラガンダを出発。学習と合唱に明け暮れて十数日、歓喜と緊張で体を硬直させながらナホトカの砂地に跳び降りたのは昭和二十三年十月十九日であつた。

## 炭坑の灯

静岡県 前 沢 豊 次

ノボシビルスクの近くにあるシベリア最大のクスバス炭坑のラーゲルに入ったのは、抑留生活も三年目を迎えた初秋ころであつた。高い板塀と有刺鉄線の幅広

い垣根とに、くまなく圍繞された外観の頑強さに比べ、半地下式の耐寒構造の低い宿舍がさびしく立ち並ぶラーゲル内部の眺めはいずれも同じことであつたが、炭塵にまみれたうす黒い町並みのそこに屹立している数々のボタ山からは、炭坑町の厳しい環境をうかがわせていた。

炭坑でのラポータ（労働）は地上での雑役と地下の採炭現場とに分かれていたが、だれもが坑内作業を恐れていた。長く続く陰うつな炭道、暗黒の地底での陰惨な労働、「佐渡の金山この世の地獄」のイメージもさることながら、真相のほどは分からないが、前年この地区の坑内で大きなガス爆発事故があり、二百人もの死者が出たというニュースが、ラーゲルに到着早々口コミで伝えられていたからである。

炭坑での地上作業をしていた折のこと、ふとしたことから現場監督ににらまれた私は、ブローホラポータ（怠業者）の烙印を押され、懲罰として坑内作業に回される羽目になつてしまった。

入坑に際しては、捕虜たちには堅坑のエレベータの